

語りの談話・文章における評価表現の使われ方について

山形大学人文学部

渡辺 文生

1. はじめに

本発表は、ストーリーを語る談話（話しことば）および文章（書きことば）において、ストーリー中の出来事に対する評価を表す表現、特に「へてしまう」と「へことができる」を取り上げ、母語話者によるこれらの形式の使われ方について、談話機能の観点から分析を行う。そして、非母語話者の談話・文章における評価表現の使われ方と対照し、日本語教育の観点から考察することを目的とする。分析するデータには、日本語母語話者15名、アメリカの大学で日本語を学ぶ非母語話者17名のインフォーマントによる談話・文章を用いる。

2. 評価表現としての「へてしまう」「へことができる」

中井(2003)は、日本語母語話者同士および母語話者と非母語話者による雑談の分析において、Goodwin and Goodwin (1992)などをもとに、評価表現を「会話参加者が話題の内容や情報について、形容詞、形容動詞、副詞、動詞等を用いて、自らの意見・感想（善し悪し、好き嫌い、価値、喜怒哀楽）を表す、またはその共感を表す発話（中井 2003:233）」と定義した。「大変だねー。」や「日本語うまいですね。」のように、発話または文そのものが意見・感想を述べているものを評価表現ととらえている。

ストーリーを語る談話・文章では、出来事の再現が中心となるため、主観的な評価を表す表現は、ストーリー中の出来事を判断の対象として、その命題に付随する形で現れるのが基本的な現れ方である。命題の骨格が格を持った名詞句と述語であるとすると、それらを修飾する形容詞などの連体修飾成分や副詞などの連用修飾成分、および述語に後接する助動詞などの文末表現などとして現れる。「へてしまう」は、一般にアスペクト形式として分類されることが多い（山田 2004；高橋ほか 2005）が、「好ましからざる事態の招来を表す（森田 1989:531）」という点で、出来事に対する話者・書き手の評価を表す形式ととらえる。「へことができる」は、非過去形で動作が可能な状態を表す場合は特に主観的な評価は含まないが、過去形の「へことができた」となると目標としていた出来事の達成を表すプラス評価の表現となりうる。

3. 母語話者データの分析

母語話者による談話のデータのうち、語り手のインフォーマントによる発話に「へてしまう」が現れた例は86例（一人当たりの使用数は5.7）で、文章のデータには68例（一人当たりの使用数は4.5）現れていた。談話・文章の中での「へてしまう」の使われ方を見ると、ストーリーが展開していく冒頭部および中間部で頻繁に使用されるが、ストーリーが収束していく終結部では使われていなかった。特に冒頭の場面の記述では、談話の場合は36例（41.9%）、文章の場合は30例（44.8%）と、全体の用例のうちの4割以上が現れていた。

「へてしまう」が用いられる出来事は、登場人物による意志的な行為ではなく、モノが主体となる出来

事や登場人物の非意志的な動作（「泣く」「怒る」など）がほとんどで、その傾向は談話でも文章でも共通であった。また、普通体の談話においては、「へてしまう／ちゃう」では発話を終了しにくく、「壊れちゃったのね」や「凧が残っちゃうわけね」などのように、「のだ」「わけだ」といった説明のムード表現や終助詞と共に用いられていた。丁寧体の談話では、「でーその凧が、屋根に引っかかってしまいます」のように、「へてしまう」で発話が終わる場合も見られた。評価表現としての「へてしまった」は、談話（用例数2）よりも文章での使用が多かった（用例数7）。

4. 非母語話者データの分析

非母語話者のデータで「へてしまう」が使われた例は、談話では56例（一人当たりの使用数は3.3）で、文章では32例（一人当たりの使用数は1.9）であった。かなりよく使われる表現であると言えるが、母語話者と比べると約半分の使用数であった。「へてしまう」が用いられる出来事はおおむね母語話者の場合と共通していたが、ストーリー終結部の出来事に使われる例や、「ちょっとうれしくなっちゃった」のように好ましからざる事態とは言えない出来事に使われる例も見られた。談話において文末に「へてしまう／ちゃう」が使われたときに、説明のムード表現も終助詞も使われないで文が終了する例が4分の3以上を占めていた（32例中の25例）。また、評価表現としての「へてしまった」の使用は、非母語話者のデータには見られなかった。

*この研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「ストーリーを語る談話・文章における日本語らしさについての研究」（課題番号：19520439）の成果の一部である。

参考文献

- 高橋太郎ほか (2005) 『日本語の文法』 ひつじ書房
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』 くろしお出版
中井陽子 (2003) 「話題開始部・中間部・終了部で用いられる評価表現」 『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp. 233-235.
森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
李麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究 会話管理の観点から』 くろしお出版
山田敏弘 (2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』 くろしお出版
渡辺文生 (2007) 『日本語母語話者と非母語話者の語りの談話における「話段」についての研究』 平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号：16520311）研究成果報告書
Goodwin, Charles and Marjorie Goodwin. (1992) Assessments and the construction of context. In A. Duranti and C. Goodwin (Ed.), *Rethinking context*, pp. 147-189. Cambridge: Cambridge University Press.
Labov, William. (1972) *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

用語リスト

語り (narrative) 過去の経験を時間的・空間的連続体として、その流れに沿って再現するために実現さ

れたことばのまとまり。(Labov 1972 ; 李 2000)

説明のムード 「はずだ・わけだ・のだ」などの文末表現。聞き手が知っていることについて、その事態が生じた理由、原因などを相手に説明しようとするものと特徴づけられる。(寺村 1984)